

# 「だけでも」考

## A Note on “Dakedemo”

山西 正子  
Masako YAMANISHI

*Keywords* : *Dakedemo*, P article, Imperfective, Optative, Emotion

キーワード : 「だけでも」、助詞、未実現、願望、心情

### 【要旨】

本稿は、助詞「だけ」と「でも」が結合した「だけでも」につき考察する。結果として、以下の3点を指摘する。

- ① 「だけでも」は、一般的に、発話者の、多くは「願望」であるが、その他の何らかの心情が明示されるか、看取できるかの状況で使用される。
- ② 「だけでも」は、過去の「実現した事実」よりは、「未実現事実」に関して使用されやすい。
- ③ 「だけでも」は、「過去の実現した事実」に言及するときは、結果に関する心情表現が期待される。「願望」の実現を述べるなら、「良かった」などの心情表現が期待される。

古典語では、助詞の複合についての考察がある。たとえば、「もぞ／もこそ」が「危惧」を表すこと、仮定の「ば」と疑問の「や」の複合の結果が、願望の「ばや」を構成すると意識されるなどである。

現代語「だけでも」については、『明鏡国語辞典』（初版2002）が、副助詞「でも」の1項目として、

（「だけでも」の形で、下に希望表現を伴って）それだけはかなえたい意を表す。「話だけでも聞いてほしい」

を明示するが（1.3で再掲）、他には積極的な指摘はないとみられる。

そのため、この発言を起点として考察を試み、最終的に、上記3点を提言する。

## 【内容】

0. 問題のありか
1. 先行文献の確認
  - 1.1 「でも」の複雑さ
  - 1.2 「でも」の主観性
  - 1.3 『明鏡国語辞典』の記述
  - 1.4 「でも」と「願望」
2. 現代語の用例と考察
  - 2.1 用例
  - 2.2 考察
3. 20世紀までの用例と考察
  - 3.1 用例
  - 3.2 考察
4. 結論
  - 4.1 形式と文意
  - 4.2 「だけでも」の特異性

## 0 問題のありか

稿者は、以下の表現に若干ながらも、違和感を持つ。

稿者注・和蘭女王から贈呈されたものの、江戸幕府の書庫に死蔵され、門外不出になっている「和蘭築城書」だが、正面きって借り出すとなると「法規慣例を盾にとって絶対貸すまい」と予測された。そこで佐賀藩から西洋の軍事技術研究を命じられていた本島藤大夫が行動を起こした。

(1) 藤大夫は、このため手づるをたよってさんざん金を撒き、やっと一見し、図面だけでも写すことができた。

(司馬遼太郎『肥前の妖怪』1965・文春文庫『酔って候』2012・16刷による)

この「若干の違和感」の由来を考察したい。

## 1. 先行文献の確認

### 1.1 「でも」の複雑さ

「でも」については、沼田善子（1986）が詳しい。そこでは、まず「でも」は「でも」か「で+も」か、が問われ、その双方があること、そして

「でも」の中には一語ではなく、格助詞や、形容動詞や助動詞の「て」形に、とりたてて詞「も<sub>1</sub>」が後接したものが多し。（174頁）

とされる。なお、上記「も<sub>1</sub>」とは、「人生の季節をも、自然の季節と同じように受け入れる。」のような用法で「単純他者肯定」と定義されている（156頁）。

実際に、稿者が実際に触れる、あるいは検索した範囲でも、「だけでも」を概観すれば、多くは、「だけ+で+も」であって、「だけ+でも」は、相対的には少ない。

しかしながら、冒頭（1）の「だけでも」は、「で+も」とはならない。「も」をともなわず「だけで」となった場合の、

（1）\* 藤大夫は、このため手づるをたよってさんざん金を撒き、やっと一見し、図面だけで写すことができた。

は、まったくの非文である。「でも」は一語とすべきである。

なお、「でも」を排除し、「だけ」のみでも、「ふくみ」は失われるものの、文意は変わらない。ところで沼田（1986）は、（引用例）必要ならすぐにでも金を手に入れることができる。「でも」を「一語か否かも、今の段階では決定できない」としており（177頁）、考察は容易ではないと予測される。

### 1.2 「でも」の「主観性」

山中桂一（1998）は、現代語の助詞の結合モデルを作成している。

ここでは、助詞を、客観的要素の強いものから主観的要素の強いものまで、Ⅰ～Ⅷ系列に分類する。その中で、「でも」はⅧ系列に属し、主観的要素が強いものとされている。

以下の考察で、稿者は「心情」という語を使用するが、根拠は、この山中（1998）の「主観的要素」にある。

### 1.3 『明鏡国語辞典』の記述

【要旨】に示した『明鏡国語辞典』（初版2002）は、副助詞「でも」について、さまざまな用法を列挙する。その1項目として、

（「だけでも」の形で、下に希望表現を伴って）それだけはかなえたい意を表す。「話だけでも聞いてほしい」

としている。

しかし、すべての「だけでも」にこの説明が適用できるのか。少なくとも、稿者には上記（1）は若干ながらも違和感がある。「下に希望表現を伴って」はいないのである。

#### 1.4 「でも」と「願望」

『明鏡国語辞典』は「希望表現」とするが、初めに、発話者の「希望」を「願望」として考察する。例文の「聞いてほしい」は、他者に対する「希望」であり、区別したい。

『日本語文法大辞典』（2001 明治書院）の、「でも」の項目では、まず「でも」は「係助詞」と分類され、その多様性が言及される（担当・久保田篤）。以下、必要部分のみ引用する（下線稿者）。

- ① 特にそれこだわらないという軽い気持ちで、例示的に提示する。意志・推量・命令・勧誘・依頼などの表現とともに用いられることが多い。順接仮定条件の条件句の中で用いられた場合、代表的な例示をするとともに、条件が成立すれば重大なことになるという意を言外に表すことがある。「そうでもしなければ、夫婦は今日迄斯うして暮らしては行けなかったのである」（夏目漱石・それから）
- ② 特別な、あるいは極端な場合を提示し、他の場合や一般の場合はもちろん同様であるという意を言外に示す。

ここで注目したい2点を挙げる。

第1点は、①に列挙された「意志・推量・命令・勧誘・依頼」の側面である。また例文の「しなければ」は「仮定」である。また『明鏡国語辞典』のいう「希望表現」をも合わせて、これらの共通点は、「実現していない」ことにある。『明鏡国語辞典』のいう「希望表現」は、「未実現状態のひとつ」と考えられるのであり、「だけでも」の「守備範囲」は、より広いのではないか。

しかるに、冒頭の用例（1）は過去の「実現した」事実を述べている。ここに違和感が生ずるものと考えている。

第2点は、①②とも「意を言外に表す／示す」との指摘をしているとおり（下線稿者）、「でも」の「ふくみ」の重大さである。冒頭の用例（1）は、形式的には事実の記述のみであり、「ふくみ」は、稿者には、ある程度まで感じ取れるが、直截には伝わらない。ここにも違和感の理由があると考えられる。

「ふくみ」について、たとえば、「しか」と突き合わせてみる。同じく沼田（1986）「とりたて詞各論」で言及される「しか」の場合、形式的には否定と共起し、とりたてられるもの以外は実質的に否定されるのであり、「ふくみ」にことさらに配慮する必要はないように考えられる。

以下、この2点に着目し、ひとまず、1語と考えられる「でも」に限って考察を進める。

## 2. 現代語の用例と考察

### 2. 1 用例

現代語の用例を「朝日新聞」から採集する。稿者が実見した例（東京本社版）とデータベース『聞蔵』からの例である（大阪本社版についてはその旨を示す）。

「だけでも」の文字列の多くは「だけ+で+も」の構成をもち、「だけ+でも」は多くはない。その中から、以下の例を示す。一部省略した部分がある。

そもそも、『日本語文法大辞典』の示す「でも」のうち、限定の「だけ」と共起できるのは、①の「特にそれこだわらないという軽い気持ちで、例示的に提示する」ものではなく、②の「特別な、あるいは極端な場合を提示する」ものである。

たしかに、『明鏡国語辞典』の指摘どおり、「願望表現」は多い。用例（2）（3）は明らかな「願望」表現であり、（4）（5）は言外に「願望」が示される。

（2） アッバス・アシュハブさん（23）は「とても悲しい断食月だった。イードの間だけでも誰も殺されてほしくない」と語った。

（祝いなき断食月明け ガザ、戦闘続く 2014・7・29 9ペ）

（3） 苦しい日常を離れられない私たちが、心だけでも自由になりたい……。そんな夢をかなえてくれるのがこの名品である。

（名宝細見 東京国立博物館から 2014・8・9 週末b・07ペ）

（4） 「ある地域で1人（稿者注・検診費用のうち）数百円だけでも協力してもらおうとしたら、検診をしなくていいと言われたそうです。こちらが自腹を切るにも限界があります」

（（スポーツヒューマン）柏口新二 野球ひじ、早期発見が大事 2014・8・8 23ペ）

（5） 羽田空港は台風11号の影響でチケット」を変更する人も加わって混乱した。東京都江東区の公務員（37）は10日からキャンセル待ちをしているという。「何とか子どもだけでもチケットが取れたらいいのだけれど」と話した。

(突風、吹き飛ぶ屋根 栃木、学校でも被害 台風11号 2014・8・11 夕刊9ペ)

しかしながら、「願望表現」のほか、「意志」や「義務」を示すものもある。以下の用例(6)は「意志」、(7)は「義務」、(8)は言外に「義務」あるいは「願望」が示される。

(6) 稿者注・大会出場者一覧

【群馬】南良昌利62

桐生市、自営業。十傑戦で入賞歴多数。「1回戦だけでも頑張る」

(吹くか若手旋風 第9回朝日アマ囲碁名人戦全国大会 20・21日、  
日本棋院会館 2014・7・14 13ペ)

(7) 国は違っても、親がマナーをわきまえ、子どもにも小さいうちから教えるべきではないでしょうか。最低限、人に迷惑をかけないということだけでも。

((声) 英国の劇場で見た親子のマナー 2014・8・10 オピニオン8ペ)

(8) 津波てんでんこ=めいめい逃げる、が津波避難の鉄則だ。「なんとか、子どもだけでも逃がせなかったか」。町の人是我がことのように悔し涙を絞った。

((磯田道史の備える歴史学) 徳島の津波：5 2014・7・26 週末b・e07 21ペ)

以上の7例について共通するのは、「最低限」のことを明示しつつ、「せめて～だけは実現したい／したかった」を明確にあるいは言外に示す点であるが、さらにいえば、「未実現」のことがらを取り上げている」のである。

用例(1)のような、すでに実現したことがらを取り上げる例は、多くはない。その中で、(9)と(10)を検討する。

まず、この「だけでも」の「でも」が1語か「で+も」かについて、判定せねばならない。稿者は、1語と判断する。

(9)(10)とも、「も」を省略すれば文意が変わってくるからである。以下、(参考例a)(参考例b)を示すが、この「でも」は、「も」を削除しても、「ふくみ」は減少するものの文意は変わらない。これらの(参考例)では「も」は、ともに削除できる。

(参考例a) エアコンの風が直接目に当たらないようにし、湿度は50%以上に保とう。加湿器がなければ、水をコップに入れておくだけでもいい。

((元気のひけつ) 目の筋肉、コリほぐして 画面見過ぎの  
「疲れ目・乾き目」を改善する 2014・6・28 週末be・e05ペ)

(参考例b) 新戦略として、10月から専用マシンの価格を値下げすると発表。お湯を注ぐだけでも飲めるが、マシンでより本格的な味になることをアピールし、喫茶店などへの売り込みも強める。

(ネスレ、レギュラーに対抗 新製法コーヒー普及へ戦略発表  
専用マシン値下げ2014・8・28 10ペ)

(9) は「雰囲気をつかめただけで良かった」とすれば、「それだけで100%満足、それ以上は望まない」となる。真意ではないだろう。

(9) 悲願だった甲子園初出場。主将の千葉は「こんな球場でやったことがないので、雰囲気をつかめただけでも良かった。試合では普段通りのプレーがしたい」と話した。

(甲子園練習・4日 第96回全国高校野球選手権大会 2014・8・5 25ペ)

稿者は、この(9)に違和感を持たない。「雰囲気をつかめた」のだから、「すでに実現したことがら」が取り上げられている。上記の(2)～(8)とは、異なる。

しかるに、それが違和感なしに受容されるのは、ここに「良かった」という話者の心情が明示されているからではないかと考えられる。

これに関連して、(10)を示す。

(10) は、「も」を削除し、「2回だけで遠くへの進学を許してくれた親に成長をみせられた」とすれば「2回だけで十分だった、3回以上は不要だった」となり、真意ではなくなる。「も」は不可欠である。

(10) 稿者注・兵庫県から、あこがれの神奈川県東海大相模高校に野球留学した2年生吉田投手が、甲子園1回戦の終盤の8回、9回に登板し、この2回をそれぞれ三者凡退に抑える活躍だった。試合は3-4で敗れた。

吉田君は言った。「2回だけでも、遠くへの進学を許してくれた親に成長をみせられた。来年の夏、甲子園に戻ってきます」

(奪三振ショー、今年は序章 東海大相模・吉田凌投手 第96回全国高校野球選手権大会 2014・8・17 大阪本社版 34ペ)

ここには、発話者の心情は直接には示されない。しかし、「親に成長をみせられた」という事実の叙述には、言外に「みせたかったので、実現して良かった」という真意が読み取れる。発話者の心情が「言外に示される」例と考える。

「だけでも」は、叶うことならエースとして先発したかった、9回まで投げきって見たかったという「願望」と「親を安心させられて良かった」が、合わせて看取でき、稿者は違和感を

もたない。

## 2.2 考察

用例(9)(10)は、文中に話者の心情が明示されるかあるいは容易に看取でき、用例(1)はそれが、稿者にはいささか通じにくい。ここに微妙な差異があり、「若干ながらの違和感」の由来だと考えたい。

冒頭の用例(1)は、創作であり、作者は登場人物の心情を、いわゆる「地の文」で直接に表すことはできない。しかし、話者の心情を何らかの形で明示すべきではないのだろうか。

稿者の違和感を払拭するには、たとえば(1)を、

(代案a) 藤大夫は、このため手づるをたよってさんざん金を撒き、やっと一見し、図面だけでも写すことができ、いささか安堵した。

と追加して、心情を代弁するか、あるいは、

(代案b) 藤大夫は、このため手づるをたよってさんざん金を撒き、やっと一見し、図面だけが写すことができた。

として、「でも」を避け、叙述に徹し、動作主体の心情を必要としない、客観的表現に改めればよいのである。

## 3. 20世紀までの用例と考察

### 3.1 用例

稿者の言語感覚の基準の一部となっているであろう、昭和以前の著作から、「だけでも」の文字列で検索した用例を示す。『「ひまわり」検索システム』および、『新潮の100冊CD-Rom版』によった。なお、省略した部分もある。

多くは「だけ+で+も」による構成であり、求める「だけ+でも」は少ない。現代語と同様である。

そして、2.2で考察したように、「未実現」の状況で使用されるのである。過去の実現した事実に関する確例はないと言える(3.2で検討する)。

以下の用例(11)(14)は意志、(12)(15)(18)は願望、(13)は命令、(16)(19)は義務、(17)は勧誘が、明示されるか、看取される。

(11) 『夫にしても糸針の手側に無いそれは餘の不自由、) 寧いつそ母様へ内々でお願い申し、針

- 箱だけでも頂きませうか』 (福地桜痴『夜の鶴 (下)』1895年09号)
- (12) 「来年は卒業だが、其卒業證だけでも讀んで、それから見えなくなりたいと言って居る。(稿者注・失明寸前の) 當人の心は實に不憫な者ではないか」と三郎は言ふた。  
(江見水蔭『朝顔』1895年09号)
- (13) 「去れ悪魔鐵幹、速に自殺を遂げて、せめて汝の末路だけでも潔くせよ」と絶叫せり。(大町桂月『文芸時評』1901年04号 上記発言は「文壇照魔鏡」の引用)
- (14) ある日私はまあ宅だけでも探して見ようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて 小石川の坂を真直ぐに伝通院の方へ上がりました。  
(夏目漱石『こころ』1914年)
- (15) 「あんな山の心持を描いた画があれば、見るだけでも見たいもんだが、ありませんね。」  
(有島武郎『生まれ出づる悩み』1918年)
- (16) 畏の正体だけでも教えておいてやればよかったかもしれない。  
(安部公房『砂の女』1962年)
- (17) (稿者注・婚礼には) せめてもとの兄弟子たち二、三人ぐらいは呼ぼう、とすすめたが、栄二はかたく拒み、形式だけでも仲人を、というのも承知しなかった。  
(山本周五郎『さぶ』1963年)
- (18) 話だけ聞いている上高地の入口である島々の宿場だけでも覗いてみたかった。  
(北杜夫『楡家の人々』1964年)
- (19) 試合ができるかどうかの感触だけでも確かめなくてはならない。  
(沢木耕太郎『一瞬の夏』1981年)

### 3.2 考察

以下の(20)(21)の2例が「で」+「も」ではなく、1語「でも」と理解できれば……沼田(1986)も「でも」が1語か2語か判定が困難なことがあるとしている……、辛うじて、過去に実現した事実にかかわる用例となる。しかし、2例とも「も」を欠いても文意は通じるのであり、「でも」を1語とは認定しがたい。

とはいえ、われわれは、多くの場合、語構成を考えながら言語活動をするのではない。「だ

けでも」という文字列あるいは音連続に接したとき、反射的に、発話者の、ある種の心情を受け止めようとするのではないか。

3.1 の諸例から、われわれは、限定の「だけ」と「とりたて詞」の「でも」の連続は、話者の何らかの心情を示すものだという理解を形成してきたのである。かりに「でも」が「で+も」の結合であったとしても、1語と受け取ってしまうこともあろう。

そして、「だけでも」の多くが、「未実現」の状況に関連するために、まれに、過去の「実現」した事実について言及されていても、そこに何らかの、「話者の心情」を読み取ろうとするのではないか。

用例(20)の場合、「思うが好い」という「命令に近い勧誘」をとまなうのだが、「御慈悲」からは「ありがたい」という心情が読み取れる。

用例(21)の場合、「めっけもの」は「幸運だ」との心情が看取できる。

(20) 稿者注・動作主体は俊寛僧都、発話者は弟子有王

「泣くな。泣くな。せめては今日会っただけでも、仏菩薩の御慈悲と思うが好い」と、親のように慰めて下さいました。

(芥川龍之介『俊寛』1900年 『羅生門』による)

(21) 稿者注・ようやく入手できた新聞についてなるほど……この記事が連中の目的だったというわけか。記事の周りに、赤インクで枠を入れてなかつただけでも、めっけものだ。

(安部公房『砂の女』1962年)

## 4. 結論

### 4.1 形式と文意

日本語では、特定の語と文意が規則的に呼応することも、緩やかながら共起の傾向を示すこともある。

たとえば、古典語の副詞「え」は否定の形式と共起する、現代語「しか」は否定の形式と共起する。「だれも」はしばしば否定の形式と共起する、また副詞「全然」は否定の形式と共起するとの「迷信」があるが、実際は「緩やかながらの共起傾向」であろう。

しかし、「しか」については、形式的には「否定」でなくとも内容的には「否定」になることはある。

(22) 結局、中国考古学に造詣の深い研究者しか発言が難しい。

(「歴史のズレ」② 明治大 石川日出夫男教授 2013・1・29 夕刊2ペ)

「難しい」は形式的には「否定」ではない。しかし、内容的には、「できない」であろう。すなわち、形式と文意は、時に、「ズレ」を生じるのである。

その観点からいえば、(1)の「だけでも」は、「非文」として排除するのをいったん保留し、一案として、

① 「だけでも」は、下に願望その他の心情を示す表現をとめない、「未実現の状況」に関して使用されることが多い。

② その延長として、まれに、過去の確定的事実を表す文にも使われる場合は、「付随する心情」が期待される。

と理解すればよい。これによって、用例(9)(10)の「自然さ」が説明できる。

(9)であれば、「甲子園練習には期待をもって臨んだ。すべてが実現したわけではないが、その中で「ようやく、雰囲気をつかむことだけはできた、それが良かった」となる。ここでは「良かった」と心情が明示される。

(10)であれば、「試合で、2回だけは登板できた。成長をみせることができた」としているが、「ひとまず満足した」との心情が容易に看取できる。

そして、用例(1)に対する、稿者の若干ながらの「違和感」は、ここに、動作主体「藤大夫」の心情が、いささか看取しにくい点にあることから説明できる。「写すことができた」から「安心した／良かった」を読み取ることは不可能ではないが、いささか客観的に過ぎるのである。

(10)との差異は、ただ1点、それが「直接話法」か、第三者(作者・司馬遼太郎)の客観記述かにあり、それが「若干ながらの違和感」の由来であると考えたい。

「だけでも」は現代語の助詞の結合パターンとして、ひとつの個性をもった存在であることが確認できたと考える。

『明鏡国語辞典』は「下に希望表現を伴って」と限定しているが、用例をみると、「希望」とどまらず、いくつかの、「未実現」の状況に関して使用されるといえるのであろう。

#### 4.2 「だけでも」の特異性

最後に、「だけでも」について、助詞の結合という点から説明したい。「でも」は、単独では「主観的要素」が強いとはいえても、「未実現」状況には拘束されない。過去の事実にも使用できる。

(作例 a) 太郎は初対面の人とでも、楽しく語り合えた。

(作例 b) 花子は相手が権力者でも、ひるむことはなかった。

「だけ」についても同様に、「未実現」状況には拘束されない。

「だけ」と「でも」が結合したとき、大きく「未実現」状況に傾く点は、注目されてよいの

ではないか。

「も」「ぞ」とも、単独では「危惧」専用ではないのに、結合すると「危惧」を示すということと類似の現象と考えたい。

以上、稿者の違和感に基づき、用例の考察を通じて、冒頭の【要旨】の3点を指摘できたと考えている。

今後、さらに用例を広く検討し、関連事実を精査していきたい。

### 【参考文献】

- 沼田善子（1986）「とりたて詞各論」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社  
山中桂一（1998）『日本語のかたち』東京大学出版会

（平成26年11月4日受理）